

会員だより

軍事研究の闇が再び？（前編）

小寺隆幸
（軍学共同反対連絡会事務局長）

大学で始まった軍事研究

2015年度から大学で公然と軍事研究が始まっていることをご存知だろうか。この年、防衛装備庁の「安全保障技術研究推進制度」が始まり、大学や国立研究所や企業が積極的に応募し始めた。初年度3億円だった予算は17年度から100億円を超え、大型プロジェクトも始まっている。例えば宇宙航空研究開発機構は岡山大・東海大と共にマツハ7を想定した極超音速飛行の研究を始めている。

日本の科学者たちは、戦争に加担した反省をもとに、「戦争を目的とする科学の研究は絶対におこなわない」と誓い（1950年、1967年の二つの日本学術会議声明）、平和憲法のもとで曲がりなりにも民生研究中心で進んできた。だが軍事化を進める安倍政権は、「大学や研究機関と連携し民生技術の防衛への積極的な活用に努める」（2013年防衛大綱）とし、とりわけロボットやAIなどの優れた日本の研究を取り込み最先端の兵器を作ることをめざしている。それは日本の科学のあり方と科学者の心性をじわじわと蝕みかねない。本号ではまず軍事研究の歴史を振り返ってみよう。

血塗られた20世紀の歴史

20世紀は科学が組織的に軍事に加担し大量殺戮を繰り返した世紀だった。



ノイエンガンメ収容所の像（筆者撮影）



実験で殺されたホルネマン兄弟（オランダで捕まる前の家庭での写真 ノイエンガンメ展示資料から）

第一次大戦では毒ガスによる凄惨な被害が生じた。空気中の窒素からアンモニアを合成することに成功したドイツの大化学者フリッツ・ハーバーは、「科学者は戦時には祖国に所属する」と愛国心に燃え、「長引く戦闘を早く終わらせ兵士の命を救う人道的兵器」として毒ガス開発を進めた。妻クララがそれに抗議し自ら命を絶してもハーバーは動ぜず突き進んでいく。だが両軍が毒ガスを使用することで戦争は4年間続く泥沼化した塹壕戦となり、多くの兵士が犠牲となった。さらにユダヤ人ハーバーが発明したチクロンは、彼の死後アウシュビッツのガス室で使われたのである。

日中戦争では日本軍七三一部隊による細菌兵器の開発、そのための人体実験というおぞましい歴史がある。この問題は未だに事実の検証がなされていず、国も責任を取らないばかりか学術界も正面から向きあおうとしない。敗戦後の1945年9月に京都大学は七三一部隊軍医に学位を授与している。「満州第731部隊軍医将校の学位授与の検証を京大に求める会」は、その論文にペストを感染させた「サルが頭痛、高熱、食思不振を訴えた」との記述があることから人体実験ではないかとし京都大学に検証を求めたが、2月に京大は調査しないと回答した。七三一部隊は3000名の「丸太」（中国人捕虜ら）を実験のために殺したが、その責任者は米軍へのデータ提供と引き換えに免責され、戦後日本医学界の重要な地位に就いたのである。

ドイツでも1942年「国家のために生体実験は許される」というヒトラーの決定の下、アウシュビッツでのメンゲレルの実験などが行われた。ここでは私が2016年に訪れ衝撃を受けたハンブルク郊外のノイエンガンメ強制収容所で

の人体実験にふれておきたい。大人の囚人とともにユダヤ人の子どもたち20名に結核菌を植えつける実験が行われ、その後証拠隠滅のために絞殺された。主導した医師ハウスマイヤーは、教授になる論文を書くために医学的には無意味な実験を計画し、親衛隊独自の科学構築を妄想したヒムラーが後押ししたのである。「ユダヤ人と実験動物の間には原理的区別はない」とハウスマイヤーは裁判で語った。（シュヴァームと医学） 大月書店）

そして何よりも最大の人体実験が原爆投下だった。投下地選定にあたって物理学者はそれまで空襲がなく原爆の殺傷力の万全なデータが得られる地を主張した。また戦後になってもビキニ水爆実験に端的なように島民は観察対象として被曝させられた。軍事技術のため、さらに自らの歪んだ「科学的探究」のためには人間の尊厳など取るに足らないという考え方が根底にあり、人種の偏見がそれを助長したのである。

キラーロボットの開発へ

このように科学は軍事に組み込まれることで変質し、科学者自身も愛国心、人種的偏見、功名心などに絡めとられ、人間的感性が麻痺していく。これは過去の問題ではない。ABC兵器に次いで今始まっているのはおぞましい自律型致死兵器システム（AIが自ら判断して攻撃するキラーロボット）の開発である。これは火薬、核兵器に次ぐ「戦争の第三の革命」とも言われている。そしてそれを規制しようと開かれた昨年8月の国連会議において、日本政府はAI兵器の有効性を主張し規制自体に反対した。これが私たちが直面する現実である。それについては次号でふれたい。